

ずっと意識してやり続けてたら、それほとんどん現実に
なってくるの。夢って掲げるものだよ

語り手 北尾 峻一（高校八期生 広告代理店） 聞き手 芝野 夏帆

夢に向かって成長した高校時代

―まず、高校生の時の話をお聞きしたくて。高校はフロンティアコース
に所属していたと。

そうですね。

―最初から内部進学をするつもりだったんですか？

最初からというのはどこからですか？

―高校に入学した時点で。フロンティアコースはやっぱり外部受験をする
人が多いイメージなんですけど。

それでいったら、いろんな選択肢を持っておきたかったということが
正しくて。だから外部受験をしてもいいなと思ってたし。あとは、自
分の興味関心をすごく色々やらせてもらえるクラスやったから、そうい
うのをしてもよかったなと思うし。どういう選択肢も取れるようなこ
とをしていこうというのを最初から、高校入学当初から思っていましたね。

―そうなんですね。アメフトは高校からですか？

高校からです。

―中学は何（の部活を）をやられていたんですか？

中学はね、バスケットをやっていました。小森先生とかって（知って
る）？

―あー知っています。

小森先生とかにすごいでいて。

―なぜバスケットからアメフト部に入ろうと思ったんですか？

多分ね、僕、相当変わってて。僕、高校から人生ほぼやり直したくら
いなんですけど。なんで高校からアメフトを始めたかとか、フロンティ
ア行っただとか明確にあって。僕、経営者になるためにアメフト始めて
るんですよ。そこにはもうちょっとワンステップあって。経営者になる
ために、日本代表にならないといけない（と思った）。日本代表に一番
なりやすい、自分が一番取れる選択肢は何かになってった時に、「あ、
アメフトやな」ってなって、高校からアメフト始めたって感じですね。

―それは未経験からってことですね。

―そうですね。中学はバスケット部なんです。

―そこで日本代表になるために、どのようなことをされましたか？
まあ、結果的に日本代表になれたんですよ、僕。十九歳以下日本代表
で。日本全国超強いメンバーと中国に行つて。大学三年生までいたんか
な。俺は大学一年生で選ばれて。全試合スタメンで出て、という形。最
終的にちゃんと日本代表取れたんやけど。どういうふうになって言われ
ると、もう目標から逆算。たとえば芝野さんさ、バトンとかもさ、恵まれ
てる体型の子と違ってやるん多分。

―はい、います。

―手足が長い子とか、体が柔らかい子とか。（でも自分は）股関節の入
りが深くてさ、どんだけ練習してもこれ以上柔らかくならへんとか。で
もちよつとしか努力してへんのにめっちゃ曲がるみたいな子達っている
やん。

―いますね。

―これはもう骨格でしゃーないって諦めたら終わりやなっていう。これ
は別になんでもそうやなと思つて。確かに俺って、あんまりアメフト
日本代表っぽくないやん。なんか体型とか。

—確かにアメフト感はあまりないかもしれません。

俺ちなみに十年間ぐらいずっと体重一緒なのよ。高校二年生ぐらいからもうずーっと。

—えー。

そう。だから、（骨格以外のことで）日本代表の目的に対して、それを自分が叶えるためにどういう努力をしていったのかをずーっと考えてやってた。

—結構細かく、このためにはこれ、じゃあこのためにはこれみたいな。

そうそう。周りがこうやってるから、ではなくて。周りはそうでもないかもしれない。それは経験者であり、体が強い人であり、びびらへん人であり。ただ俺は違うから、ってなった時にみんなと同じ練習していいんだっけという。コーチは足の角度はこうって言うけど、それは体がゴツい人の歩数じゃない？とか。じゃあ自分はこういうふうによったほうがよくない？とか。自分で考えて、練習に落として。トレーニングとかも全部そう。

—高校生からアメフトを始めたきっかけは日本代表だったと思うんですけど、楽しさとかやりがいありましたか？

でいくとね、すごく楽しかった。僕はほんとに高校で人生変えていただいたなと思って。八反先生とかってまだいらっしやるよね？

—はい。去年担任でした。

あ、マジ！もうほんとに八反先生とかがマジで俺よかったなって思ってた。俺ね、いい意味で言ったら、自分を通せるっていう人なのよ。自分が正しいと思ったら俺はこれをするっていうタイプなのね。さっきの話聞いたらさ、「あ、すごいなー」って多分思うやん。（自分の目標から）逆算して、言われたことをやるんじゃないかって、自分に適したこと

をやっていくっていう。自分の体型にはこれが合うからこういうトレーニングをしますみたいな。でもこれチームから見たら、どうかなっていう。

—あーそういうのありますね。

そう、分かるやんか。でも、八反先生も、てか八反先生がそういう人やったからチーム全体も僕を頭ごなしに否定するとかではなくて、「え、なんでなん？」とか、ちゃんと対話をしてくれたりとか。俺は「経営者になるために」っていうのが高校の時の意思決定の全てだったから。てかさ、アメフト部ってね今もやってるのかわからんけど、アイリス十キロランがあるん知ってる？今はないか。

—あんまり（長距離を）走ってるイメージはないですね。

昔とかはあったんよ。俺マジで意味ないなって思ってたんよ。だってアメフトって短距離を連発するスポーツやから、長距離っていうその筋肉いらんくない？みたいな。俺もう「無駄やと思います、やりたくないです」みたいな。めっちゃめっちゃ（笑）めんどいやんか。だったら俺、サクスードってわかる？

—わからないです。

え、今数学の参考書ってなんなん？

—コネクトっていうやつです。

あ、名前変わったんや。数学とか理系の参考書を俺読みながら走ってたんよ。

—えー、すごい！（笑）

十キロ。俺もう嫌やから、勉強それやったらしたいし。てか必要な練習をしたいし。それでもだめやったら「俺はもう勉強をしながら走ります、無駄やと思うんで」ぐらいの感じでやってたんよ。それこそ、俺結

構スタメンやってたんやけど、高校二年生の頃とか。でももうアメフトやめて、プログラマーになります（と言ったことがあった）。

—おー急に。

そう（笑）急にね。ただ、八反先生って、すごいな、器広いなって思うのが、そうなった時とかも、ほんまに頭ごなしに否定するんじゃないかって、「じゃあエンジニアになるのはどういうことなのかを考えてみる？」というので。その当時の校長先生が大学の理工学部、電子工学科？情報、なんやったつけ。

—情報理工ですか？

あー情報理工かな。その教授もされてたんよ。情報理工の教授で立命館守山の校長やったんよ。その人に時間とってもらって、面談？二人（八反先生と教授）とも忙しいのに三人での面談の時間を取ってもらって。それは、「こいつちよつとわかってへんから、教えたってくださいよ。」って形じゃなくて、プログラミングとか、エンジニアになるってどういうことなんかをちゃんと話してもらって。それこそ俺が行ってたサイエンス（フロンティアサイエンスコース）って、大学の授業も受けたんよ。そこで実際に情報理工のところを取ってやってみたいやん。辞めるとかではなくて、大学の授業を一回とってみて自分でも勉強してみて。それを継続しながら要はアメフトも続けて。それをするために部活を削ってやろうとしてるやん。でもそうしなくても君のクラスに關しては、授業の一部で大学の授業を受けることができるやん。そこで理工学部のやつ受けたらって（教授から言ってもらった）。で、俺実際にやった。「うん、確かに」って思っつて。納得やろ？普通に。

—そうですね。

で、やったら、確かにちよつと違かったかも。俺がやりたいのってこ

ういうことではないかも。楽しいけど自分の性にはあってない。才能はここには大きくない、って思った。戻れる場所をちゃんと作ってくれたよね。無鉄砲に動くんじゃないかって。そういうのを含めてやってくれたチームだったし、監督だったし。だからね、アメフトのチームはすぐね、好きだったね。

サイバーエージェントでの経験が導いた現在

—以前はサイバーエージェントで働かれていたと思うんですけど、なぜサイバーエージェントに入社したって思われたんですか？

もう最初から本当にね、マジで俺いい選択やったなと思っつて。もちろん経営者になるためで。ちよつとむずい話にもなるんやけど、大きく二つあって、一つはキャッシュエンジンとなる事業を自分で再現性高く作るためっていうところ。もう一つが自分の基準値を上げるためっていうところがある。キャッシュエンジンって何かって言ったら。例えばサイバーの話やったら、サイバーエージェントって何で知ってる？

—A B E M A。

A B E M Aよね。

—はい。

そう、A B E M Aとか。あとアメブロ（アメーバブログ）とかもやってんの。ただ、広告代理店やってるって知ってた？

—知らなかったです。

知らなかったよね。あとは、ゲームやってるのは知ってる？

—なんとなく知ってます。

うんうん。A B E M Aとかが一番有名やんか。ただ、三年前までは売り上げの、六〇パー七〇パーは広告なの。そうやって広告で稼いだお金

をA B E M Aとかに投資してんのよね。それで最近A B E M Aがでかくなってきた、これが、キャッシュエンジン。

キャッシュエンジンっていうのは、お金を稼ぐ事業と、投資をする事業を分けて考えることが結構大事で。俺はうまくいってない会社って、最初からこれ（投資をする事業）をやるうとする。これってみんながやりたいことやから。みんながやりたいことなんて金にするの難しい。継続するのは難しい。だから俺は、まずはここ（お金を稼ぐこと）をしつかり固めて、次にこつちを投資するために。

今は広告代理業っていうのはね、めっちゃめっちゃ儲かる。俺は得意であり、好きであり、金を儲けれる領域のとこやから。まずそれを理由にサイバー、サイバーは、そのインターネット広告の領域においてはマーケットで一番やし、しかも若手からさせてもらえるような領域。しんどい領域やけど、若手からさせてもらえる領域だったから行っちゃったっていうのがまず一つ。

もう一つが、基準値は高くつてとこやねんけど。俺、これね、みんなに大事にしてほしいなと思ってるのが、環境によって人って左右されるってよく言うかなと思うんやけど、まさにこれはそうで。だから俺は日本一のインターネット広告会社で、ほんまにサボらずにやってる人たちがいる領域で、しかも広告の回すお金でも（基準値が高い）。例えばさ、俺って今自分で経営してる広告代理店の会社って、年間の売り上げで言ったら〇〇億ぐらいある。

—えーすごい！

ただ、別に俺はこれすごいとは思ってなくて。なぜかって言ったら、サイバーエージェントもつとやってるから。もつと努力してる人も知ってるし、もつと作ってる人たちも知ってるし。自分たちの〇〇億って、

確かに周りから見たらすごいかもしれないけど、俺が知ってるレベルからすると全然大したことない。だから、別に驕ってもないし、これで満足してないし、もつと行かなあかん、って思ってるし。それはトップを知ってるからっていう。これね、結構大事。だから、基準値が高い会社は俺が行きたかったっていうところを含めて、この二つの理由でサイバーエージェントに。

—サイバーエージェントで苦労されたこととかありましたか。

めっちゃあるよ。てかさっきの話した通りで、苦労しに行ってるから。もう死に行く気合で行ってるから。本当にもう自分の限界を突破に行くつもりで行ってるから。例えば一年目の時とか、福岡で四週間連続ぐらいオフィスに泊まり込んで、土日含めてね。睡眠時間一日一・五時間から一時間ぐらい。

—えー。どうやって。

やばいよね。俺バリバリ追い込むつもりでいたから、オフィスから歩いて二分ぐらいのところ、家を借りて。ほんまに家帰んのシャワー浴びるためだけみたいな。

—その中で、なんか印象に残ってる案件ってありますか？

なんか案件というか、サイバー入るまでって、経営者になりたかったことが俺の夢だったんよ。でも、経営者になるなんて、正直めっちゃ簡単なの。だって、法務的な手続きで言ったら、法務局に会社作ります言うて、今やったら一円で作れるから、それするだけで経営者になれるの。でもそれでいいの？って言ったら全く良くないわけよ。そんなことをするために人生ずつとかけてないから。だから自分の人生かけるものが欲しかった。それが見つかったのがすごい良かったところやなと思ってる。それが何かって言ったら。俺、頑張ってる人が評価される世の中にした

い。芝野さんって、天才タイプ？頑張り屋さんタイプ？

——うん。でも頑張ってきたと自分では思ってます。

俺もなんかそういう風に思うかも。大体さ、目見たら分かるなって、俺思ってたさ。頑張ってるタイプのひと、驕って、もう何もしないひとかもいる。社会人の時もずっと辛かったのよね。俺、あだ名パッションなのよ。大学生以降。サイバーエージェントでもあだ名パッションって呼ばれて。でも、最初の二年半とあって、「全然パッションないやんけ」とか言われたり、「パッションが案件に入ったら沈むな」みたいに言われたりとか。そんな風に言われて、めっちゃ辛くない？

——いやーしんどいですね。

俺、もう死ぬ気で頑張ってるのよ。でも、そういうこと言われちゃう。でもさ、それ言われて諦める？

——諦められないですね。

諦めへんよな。でもさ、自分がすごいとは思ってないやん。でも、自分ならできるかもしれないって思いたいし、思ってるやん。俺、そういうやつがめっちゃ好きなの。俺が社会人、二年六ヶ月目かな、の時に上司が変わったのよね。その人って女性の方やねんけど。今までの人って、俺を侮辱してた。「パッション、全然あかんな。」「パッション、やる気あるん？」人をけなして、否定してきた。俺めっちゃ辛かったんよね。俺があかんのかな。こんなに頑張ってるのに、俺ってほんまにできひんやつなんかなとか思っちゃったし。でもその方は、俺の作った資料に対してフィードバックをくださる、いい時に褒めてくださる。その人って、サイバーの中でもすごい仕事できる人やねんけど。俺もうポンコツやから、その時って。俺がやるよりも、その人がやった方が早いわけ。今までもそうやって仕事を奪われてきた。「パッション、おっかい仕事

任せれないから俺がやるわ」みたいな。でも、その人はおっかい仕事を少しずつ任せてくださる。でも、時間かかんのよ。ギリギリになんのよ。でも、その人は待ってくださる。俺に期待してくださるの。頑張ってる俺を見てくださってるの。すごい嬉しくて。これが人を見てくれるってことなのかって。俺はすごくそれで安心感を得たし、「この人からは裏切られへんな」っていう風に思ったし。もっと頑張って、少しづつ能力がついてきて。でもまだ成果は出えへんから、能力がついてきて。でもそこでもその人は諦めずに俺を見てくれたし、俺もだからこそ諦めずに自分を信じてあげれた。少しづつ成果も出てきて、評価もされるようになってきて。

今（自分が経営している広告代理店は）三年目の広告代理店やねんけど、ここ十年で一番うまくいってると自負してる。でもそのぐらいなのは本当にその人のおかげ。だから俺は本当に頑張ってる人が評価がされる世の中にしたいなって。その人たちが、頑張ってる人が、自分自身のことを好きになれる世の中を作りたいなっていうのが、俺がサイバーで見つけた、人生をかけてやりたいこと。

——夢というか目標を明確にするっていうのが自分は難しくて。どうやってらはつきりしたものにするっていうのが自分は難しくて。どうやって

俺が高校生でアメフト始めた時、日本代表になりたいと思った時、マジで想像もできなかったから。ちなみに今言ったこととかも、まだ想像はできてない。でも、徐々に強くなってくる。夢を本気で思ってた、ずっと意識してやり続けてたら、それどんどん現実になってくるの。夢って掲げるものだよ。

——どんなに不可能に思えても。

うん。自分が信じてあげれるから。自分がそれを馬鹿にしないかなの

よ。それがね、すごく大事だと思う。自分が自分のことを無理と思った
ら、そこで止まっちゃうから。自分が一番自分の味方であってほしいな
と思うし。どんなに苦しい時も。ちなみに（自分の）会社この二年とか
で何回も飛びかけたし。

—そうなんですか。

そう、そんな簡単に上手くいきました。儲かりました。なんてことは
ないから。

—その時はどうやって巻き返したというか。

やりたいことがあるから。そこに対して当たり前のことを、当たり前
にやり続けるってだけ。逃げずに。これだけ。もうなんか魔法の薬とか
ないのよ。多分。バトンの世界でもそうや。勉強の世界でもそうや。頑
張ってるとは別に思ってないもん。当たり前やと思ってる。その基準な。

立守の良さ

俺、立命館守山行って、本当によかったなと思ってるんよ。何がよか
ったかって言ったら、正解を求める勉強をしなくていい。これね、多分、
芝野さんとか在校生が思ってる以上にアドバンテージ。自分の好きなこ
とを、正解を気にせずでんきのよ。自分で正解を作れんのよ。自分で想
像力を働かせれんのよ。正解を求めるセンター試験の勉強とかななくて
いい。これね、ほんとに大事。今、正解を出せる人間じゃないからね。
二十四時間低賃金ですつと働ける、A Iおるから。その人でしかできな
いこと、その人の志向性でしか、その人の考え方でしか出ないようなこ
と。そういうのがね、すげえ求められる。

立命館守山って、色々やらせてもらえるやん。別に正解がないことも。
そういうのにチャレンジできるのマジでいいし。例えば、部活とかもあ

んなに最後まで一生懸命できるなんて経験ないやん。
—はい。

すっごいいい場所。本気で自分のしたいことを取り組める場所やし。
すごく恵まれてるから、やった方がいいなと思うし。時間があるとい
うか、色々考えてもいい余裕を親御さんが作ってくれてるのが、今この
時間やし。しつかりね、みんなにも使ってほしいと思う。

—やりたいことがあったらすぐ。

そうそうそう。守ってくれるから、学校がしつかり。八反先生も本
当にね、守ってくれたなって思う、俺のこと。すごく優しかったと思う。
色々チャレンジができたから。多分他の人たちは大学でチャレンジする
ようなことなの。俺がやってきたようなことって。弁護士やりたいかも
いやいや、プログラミングやりたいかも。プログラミングやりたいから
P C買って、大学の授業で受けて。実際にプログラミングスクール通っ
って。（これらのことは）大学でやることなのよ。でも俺は高校ででき
たから。自分は（プログラミングは）違うなって思えたから、後腐れな
く本気でビジネスの方向に吹っ切れたのよ。俺たちの特権や、これ。

あとは、部活とかを通して本気で物事に立ち向かう。期限とか、大学
受験があるからとか考えないといけない他の人たちにはできない。三年
間本気で一つのことに立ち向かうっていう経験もできるし、いろんなこ
とを感じるっていう経験もできるやろうし。だから、それを存分に楽し
んで欲しいなっていうのがあるかな。

【感想】

インタビューを通して、幼い頃からの夢を追い続けた強い思いを感じま
した。うまくいかないこともあったそうですが、努力することを当たり



左 語り手 北尾峻一さん

右 聞き手 芝野夏帆

前だと考え、決して諦めない姿に心を動かされました。やりたいことに向き合えるこの環境に感謝しながら、全力で残りの学生生活を送りたいと思いました。